

---

# アカンシャス・ワールド

星河 翼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アカンシヤス・ワールド

### 【Nコード】

N2176D

### 【作者名】

星河 翼

### 【あらすじ】

悪夢を食べて生きる生命体である、恵。少女はアカンシヤス・ワールドのプリンス候補。そして私は、彼女に拾われた、悪夢を食べれない女、絵夢。人間界に降りての修行も残り一週間の期限。そこで恵の身に事件発生！その鍵はどうやら、アカンシヤス・ワールドのプリンス候補が握っているらしい？！ちよつとラブ物SF・ファンタジーです。

## #1 生まれ故郷

夢の始まりは突然始まり、夢の終わりは突然終わる。そしてその性質は刹那に自らの本心を映し出す。それが、夢。だから、静寂の暗闇の中私は願う。自分の本来の姿を……  
ありかた

アカンシャス・ワールド。そこが私の生まれた世界。暗闇に閉ざされた妖艶で、何とも残酷な世界。私の今までの印象はこれだった。私は、此処で生まれ三歳の時に親に見離され捨てられた、孤独な子供だった。

この世界では、ありとあらゆる者達の悪夢を喰らい、そしてそれを糧として知能を得、生きながらえていくことが出来る。しかし、私は生まれながらそれを行うことが出来ない、稀な異端児だった。だから、ついに母に愛想をつかされて眠っている内に森深くに捨てられた。正しく言えば置き去りにされたのであった。そこは姥捨て山ならぬ、孤児捨て森。

別に恨んでなんかないさ。これが私の背負った業なのだから。小さいながらにそんな冷めたところが有る子供だった。

夢を喰らうことが出来ない者には、額に星型の黒子ほくろが生まれながらに刻まれている。その理由は依然として判らない。何故そう言う運命として生まれるのかを。

そして、当時そう言う者達にはそれを補うための、特別な薬が出回っていた。しかしそれは法外に高いものだった。只でさえ、家計に余裕の無い貧乏な私の家でそれを購入することなど出来はしなかった。町外れの小さな村に住んでいた私達家族は、ニーディーという下級階級の家系だった。

それでも、始めは母に愛されていたのだと思う。その貴重な薬を買って来て私に飲ませてくれていた。だけど、それは一週間の飢えを補うだけの虚像。何の改善にもなりはしない。そんな事にお金を

使うのが勿体無かった。だから、母は耐え兼ねたのであろう。母にだって父、私の妹という家族を養うためのちゃんとした生活設計が有る。そう、私は只の母の枷に過ぎなかったのだから。

あの暗く腐臭のする森の中、私は一週間当て所もなく這いずり回った。それは生きることを放棄することが出来なかった。と言うわけではなかった。何かに取り憑かれていただけかもしれない。飢えというものを只どうにかしたくて足掻いたと言っただけだ。そして、ついに動くことが出来なくなり、森の出口近くで体を丸め蹲っていた。涙も出やしない。いや、元々泣くと言う事が出来無かったのだけれども……もう力も無く、暗闇に息を潜め只そこで最期の時を待っていた。

しかし、そんな私を見つけてくれた子がいた。同じ年位ではなからうか？丸くて大きな瞳を見開いて、こう問いかけてきた。

「あたしのところにくる？」

と。私は、それがどういう事なのか？理解出来なかった。それだけ意識がハッキリしてなかったのだろう。多分、私は頭を縦に振ったのではなからうか？そうでなければ、次目が醒めた時、あんな豪華な屋敷のベッドに身を委ねていたりするはずも無いのだから……

「恵様？お邪魔いたします」

十五歳の私は、今地球と言う悪夢の宝庫、三次元の世界で、私を助けてくれた恵様と共に社会勉強のため修行体験をしている。

私は絵夢。そう名付けられ恵様と共に何不自由なく育てられた。恵様の家は、アカンシヤス・ワールドで言うところの、ノウブル（貴族）であった。だからその後、あたしはそこで恵様付の表向き、お抱え侍女として生活することとなり、生き抜くことが出来たのである。

そして、この修行は、恵様のノウブルで行われる極秘の、数少ないプリンセス修行でもあり、私はそのお供。恵様を主人として共に

この地球に降り立った訳だ。

期間は一年間。後、一週間でその修行を終えることとなる。このまま何事も無いことを願いつつ私は毎日生きていたりもする。

私は、北山<sup>きたやま</sup>絵夢<sup>えむ</sup>と名乗っている。恵様は、都築<sup>つづきけい</sup>恵と名乗り、私の隣の家に住んでいる。

流石に、地球での無意識界を改造するのに（悪夢を取り込む事は出来ずとも、無意識界を変化させることは出来るよう学習してきた）二人同時に同じ家の子として存在することが出来なかった。その為、お隣同士で落ち着いたのである。

そして、この世界の高校と言う所に私達は共に通っている。残り一週間で此処ともお別れ。私は、恵様のお目付け役なので、無意識界を操り同じクラスで恵様を見守ってきた。

澆<sup>しやう</sup>漑<sup>がい</sup>として、元氣一杯の恵様は今のところ何も問題は無かった。この世界でも恵様はコロコロとよく笑っている。プリンセスとしての要素を得るのにも最適のはず。恵様に必要な物が何なのか？それは私には判るはずも無いのだが、でも、恵様が笑っていられることが一番であると信じている。そう、何も問題は無かったはずなのであった。

「あら。もう、そんな時間？」

二階の窓際から私が顔を覗かせた事で、恵様はいつもと変わらないう様子で私に問いかけられた。

「宿題ですか？」

私はベランダを下り、恵様の部屋へと入った。いつもの日課で訪れる時間に恵様が勉強をされていることに驚く。勉強お嫌いなのに、宿題？

「うゝん。そんなところで、悪夢<sup>イル</sup>の補給ね？」

「はい……いつもお世話になります」

悪夢は、お昼の間に睡眠をとる形で得たモノを頭に蓄積した恵様から独自の方法で補給する形を取り、それを受け渡しして下さる事

で私の精神は生きながらえている。

受け渡し方法としては、ニーディー生まれの者は、ノウブルの者とおでこをくつつけ、その者が念じると、自然と補給することが出来るのである。そして、これを一日一回夜にしている。別に、毎日しないといけない訳では無い。一週間に一回で事足りるのではあるが、集中力が衰え、衰弱してしまう恐れがあるからと、恵様から、きつく毎日の日課として私に義務付けられた。とてもありがたい事である。

だから私は、恵様には頭が上らない。でもそれは、生きていくために必要だからとか、同情心を掻き立ててくれる御節介だとか決して思っていない。心の底から尊敬し、また個人的にも愛らしい恵様に敬意を表してのことである。

「どう？今日の悪夢は？」

この悪夢補給が済んだ瞬間、目の前に有った恵様の丸くてパツチリとした瞳が大きな瞼に包まれにつこりと微笑んだ。そして、

「悪夢って、同じものが無いから、味も様々だよな？本当に飽きないわ」

コロコロと笑いながら、私に向かっておっしゃった。黒い髪にシヨートヘア。恵様の個性そのものが私の目の前にある。それが私にとっての一時の幸せだったりもする。

「ありがとうございます」

お辞儀をし、部屋に戻ろうとした。しかし、踵を返した次の瞬間、私の心を凍らせる一言が恵様の口から発せられたのである。

「あたし、アカンシヤス・ワールドには帰らないから」

私は一瞬瞬きをして、その言葉を頭で繰り返した。そして一言、

「……え　っ！」

引き返せない展開に突入してしまったのであった。

その日の夜は眠れなかった。この事を、どう報告すれば良いので

あろうか？プリンセス候補生である恵様の付き人としてこの地球に送り出して下さった、お優しい恵様のお父上と、お母上。そして私の任務が遂行できない事態。

恵様の、お気軽な発言と重大任務。どちらも大切なこと。でも何故？恵様は帰りたくないのだろうか？それとも、この地球に何かしら興味でも持たれたのであろうか？

結局、恵様は真実を話しては下さらなかった。でも、見た感じから察するに、目を輝かせて、夢見がちな瞳をしていたこと。その辺りに何かあるらしい。そして、眠れぬ夜を過ごし、報告も愚か、私は悶々と頭を働かせる羽目になったのである。

朝は、腫れぼったい目をして私は、いつもと同じく恵様と共に、高校に登校した。

廊下を歩く際、人懐っこく明るい恵様に声を掛けてゆく女生徒達数人。そして、その先に井戸端会議をしている者達の群れと遭遇。

「うわあ〜」

隣で、恵様が何かを見つけて嬉しそうな声を発せられた。私は、何事だとその先を見た。

そこには、この学校のアイドル的存在で有名な？すげつあつし杉浦厚史と、前園霧人そのきりとの両名がいてその周りに生徒がたむろしていた。私はこの二人を敬遠したい類としてみていたりもする。

「げっ……」

しかし、恵様はその様子を興味深そうに見ていた。もしかして、どちらかを好きにでもなったりとかしてたりしませんよね？恵様？一瞬不安が頭を過ぎってしまった。仮にもあなたは、今年度のアカンシヤス・ワールドのプリンセス候補生なのですよ？判ってらっしゃいますか？私は不安げに背の低い恵様を見下ろした。でも、その事に気づくことなく、恵様はその団体に目を見張らせていた。

そうだな。私が独自に解析すると、杉浦という少年は、学年一のワンパク坊主。ちよっと癖っ毛気味の黒い撥ね髪と、垂れ目気味の

大きな人懐っこい瞳。そして、いつも顔に絆創膏を貼っている落着きの無い少年であり、バスケットが得意でスポーツ全般は何でもこなし、男子の間で特に注目を浴びている。

まあ、親しみやすいキャラだとは思う。勉学に関しては、そんなに良い評価を得ている気がしない。恵様と張り合える位の知性度だと思われる。そんなところが彼への見解だ。

そして、もう一人。前園と言う少年は、文武両道、品行方正。シヤープな瞳と顔の輪郭が二ヒルなイメージをかもし出し、特に女生徒に優しく落ち着いた物腰をしている。それも有り、女生徒の憧れの的。まあ、私が見ても特に悪い所は見受けられないが、それでも地球人だからとしての見解を置いて考えると、恋愛対象に値はしない。

そんな正反対の二人。しかしこの二人はつかず離れずいつも行動しているの、より目立つ存在だったりもして人気が高い。休み時間を利用して、友人達はこの二人に逢いに来たりもする。

そう、私と恵様はこの二人と一緒にのクラスだったりもすることを忘れてはならないことだったりして……

そんな中、ホームルームの予鈴チャイムが鳴った。

「で、あるからして……っと……またですか！」

授業は三時間目の数学。担当の教師が眼鏡をすり上げ、ある者に目を光らせた。

私は、それがいつもの事だと判ってはいたが、仕方ないと視線を送った。

恵様が、私の為に悪夢を補給するための居眠りをなされていたのであった。

私は、無意識界を作用させる為いつものように、手を上げようと右手に意識を馳せた。しかし、この時それを阻む者がいたのである。

「はいはい、先生！都築さんは、体調が悪いそうなので、俺が保健室に連れて行きます！」



元気で少しハスキーな声が教室に木霊した。それは、恵様と特別面識が有るわけでも無い、あの、ワンパク坊主の杉浦厚史であった。「な……」

私が無かを言う前に、既に杉浦は恵様をおんぶして教室から抜け出していた。

勿論、教師も、クラスの皆も、コンビで名を売っているもう一人の前園も目を疑うようにその行動を見守った。誰も口を挟めなかった。それだけ有り得ない構図がそこに有ったからである。

私は、この三時間目を終わるとすぐさま保健室へと走った。それもそのはず、あの杉浦が、結局あの教室に戻ってこなかったからであつた。

『バンッ』

思いつきり、扉を開き中へと急ぐ。心配で形振り<sup>なりふ</sup>など構っていらなかった。

保健室には、先生らしき者は居なかった。その代わり、白いカーテンがベッドを囲むように閉じられていた。

私はその奥に、杉浦の足首を発見した。

「ちよつと、あなた！恵様……恵に……何かしなかったでしょうね！」

カーテンを『シャッ』と開くと一瞬、主従関係だとバレてしまいそんな言葉が出そうで言葉を直した。

「ん？えくと、北山さん？だったっけ？」

私は、パイプ椅子に座っている杉浦の襟首をつかみ上げそんな勢いで突つかかっていたのに、杉浦はのほほんとした顔で、そんな質問を返してきた。

「え……そうよ。あの、何かしてないでしょうね……」

出端をくじかれた気分になって、私は躊躇ってしまったが、こいつのペースに合わせるのも癪だから、もう一度話を戻した。

「都築さんならグッスリ休んでるよ？よほど疲れてるんだね？」

私の問いかけとは関係ないことをゆつたりとした口調で話しかけてきた。だけど、これにはちよつと心に『グサリ』ときた。ま、疲れてるわけではないけれど、恵様が昼間こつやつて睡眠を取るの私のせいだから……私には特別何かをして差し上げる事も出来やしない。そんな気持ちで凹んでしまった。

「厚史！」

言い返す言葉が無い私と、杉浦の間に割つて入るように、前園が静かに現れた。いつ入つて来たのか判らない位、ひっそりと。そして、一気に杉浦の元へと前園は足を伸ばしてくる。

「お前は、授業サボつてこんな処にいるなんて、どう言つつもりなんだ！ いい加減、勉強に励め！ そう言う事だから、成績が伸びないんだ！」

こちらは、命令口調。何なんだこの二人の関係は？ 仲が良いのでは無いのか？ 端からはこういう所を見かけたことがなかった。だから、私は呆氣に取られてその場に突つ立つて、そのやり取りを聴いていた。

「だって、数学つまらないんだもん！ 霧人のその横暴な勉強への勧めつて俺、いい加減勘弁して欲しい……」

言うや、杉浦の首根つこを捕まえて前園は教室に戻るように促していた。杉浦はそれでも抵抗してズルズルと保健室の外に引きずられて行つた。

「あ……都築さんに宜しくつて言つておいてね？ 北山さ……ん！」

「黙れ！ 馬鹿者！」

嵐の様なドタバタがそこにあつた。『ピシヤリ』と、保健室の戸が閉まる音が室内に響く。

私は、杉浦と前園のその行動の果てに有るものが理解できなかった。こういうモノなのだろうか？ 地球人という者は？ 判らない……でも、杉浦はやはり変人だとそう思つてしまった。そして、この件はもう忘れて流そうと心に誓つた。

それから私は、静かな寢息を立てている恵様が横になっているベツドを見た。

「すみません。恵様……本当にご迷惑をおかけしてしまつて……」  
健やかなその表情を眺めながら、私は恵様の額にそつと手を乗せた。それでも恵様は目を開くことなく休んでいらつしやる。そんなのどかな時間を遮るように、四時間目の授業の予鈴チャイムが鳴つた。

「また、後程参りますね？」

私は、心を込めてそう呟いた。

しかし、いつもなら起きていてもおかしくない時間帯。多くても三時間すれば起きてるはずなのに……

恵様は、保健室からこの教室にお戻りになられなかった。私は、昼食の間恵様に付き添つた。様子を窺いながら片手に弁当を抱えて食べた。勿論恵様のお弁当も、お持ちした。その時は、何もいつもと変わらない様子であつた。

しかし覚醒なされないで、五時間目の休み時間を利用しようとした。それまでにはきつとお戻りになられるはず。そう思っていたのに、姿をお見せになれなかった。

余りにも不自然すぎる。私は、不安が募つた。そんな気持ちの六時間目。手元の時計型アカンシャス・ワールド通信機器のアラームが鳴つた。

これは、地球人には聴こえない周波数のもの。なので、私以外には聴こえるはずも無い。私は、時計型通信機器の発信指令を見た。文字盤に書かれている文字。これは、地球人が使っている、携帯のメールのような物と言つたら判つてもらえるであろうか？それには次のような事柄が記されていた。

『アカンシャス・ワールドに異変。眠りに就きそのままになる者続出。悪夢に何かの原因が隠されている模様。その原因を突き止め、

そして、アカンシャス・ワールドの未来を取り戻せ！」

この文字を見た瞬間、私は背筋に冷たい物が流れ落ちた。それは、もしかしたら、恵様にも関係が有ることなのかも知れないから。

私は直ぐに、この事例の返信を行った。勿論、恵様のお父上に向けて。

『恵様が起床なされません。追って連絡をお待ち申し上げます』

それに対する返信はこうだった。

『今地球に、プリンス候補生が舞い降りている。その者が原因究明の鍵を握っている可能性がある。時機を見て、その者を捜し出して、可能性を見い出すように。絵夢の手にこの事を委ねる』

プリンス、候補生？

私は、その文字を何度も反芻した。この地球の一体何処に！アカンシャス・ワールドは狭い。地球の一万分の一しかない。だから、それを考えると眩暈がした。地球の広さと来たら尋常では無い。只でさえ、昨日は寝ていない。ガンガンする頭と、どうしすれば良いのかの不安で一気にこんがらがった。

落ち着け自分！

とにかく、私は此処にいるべきではないと察知し、右手を操り無意識界を操作した。

教室は、私を除く皆を置き去りに、授業を進めている。そのはずだった。しかし、二人。そう、事もあるうにあの厄介な杉浦と前園を残し空間が歪んでしまったのであった。



## #1 生まれ故郷（後書き）

短いですが、章に区切ってみました。  
もし宜しければ、このままお読み頂けると幸いです。

## #2 プリンس候補生

「どうして、あんた達が此処に居るのよ！」

私は、もう訳が判らずに問いかけていた。それはそれは、かなりきつい視線を向けていたことに違いない。余裕が無かったためである。今すぐ、こいつらの記憶を改竄かいさん（記憶を書き換える）しようと思いを飛ばそうとした。しかし、

「北山さんって、やっぱり、アカンシヤス・ワールドの人だったんだね？」

杉浦が、当たってた！という表情でにっこり微笑み、私に言った。  
「な……」

言葉に窮している私に、

「厚史……お前は自覚って物が足りない。そうポンポンと言っても説明がつかないであろうに……」

前園が、詳しく説明をしようと私に視線を送った。

「僕達は、アカンシヤス・ワールドの秘密特別捜査隊の者なのです。突然、アカンシヤス・ワールドから指令が出たので、その捜査をしようという段階なのです。北山さん？貴女がこれから成すべきことは、きつと僕らと同じことなのでしょう？だから、無意識階層を操った。そして、その周波数に僕達も乗らざる負えなかった……ならば手を貸して頂けませんでしょうか？その方が、実際、事を荒立てなくてスムーズに行く」

秘密特別捜査隊？私はそんなものが存在していることなど知りもしなかった。本当なのだろうか？でも、実際こうして私達三人はこの半異次元空間にいるのだ。信じるしか無いのかも知れない。

「話は判りました。しかし、私の使命は、アカンシヤス・ワールドのプリンス候補生を捜し、そして、この状況を打開する命を受けます。それを念頭において頂きたくそう思います」

そう。私の使命はこれだ。だから、こいつらに手を貸すのは少な

からず無いであろう。

「あ、それなら、プリンス候補生は俺……モガモガ……」

杉浦が嬉々として何かを言いかけた。が、それを前園が真後ろから羽交い絞めするかのように口を掌で遮った。

「何？心当たりでも有ると言っの？」

「何もございません」

前園は、紳士的な面も有るが、どうも杉浦に対してだけは有無を言わせない何か有るらしい。

「で、これからどうしますか？僕の兄が、この地球で管理職に当たってます。是非、北山さんも合流しませんか？あなたが遂行しようとしている事柄も僕達の使命と同じ点を通る事になりますから。同じ、アカンシヤス・ワールド救済に力を注ぐのも一考かと思われますよ？」

にこやかに、そしてその裏、何か有るかのようにそう言った前園の顔は、私の心に何かをもたらしただけ気がした。

「そう。判ったわ。なら、そのお兄さんとやらのところに行きましようか？」

一体誰なのであろうか？この学校でそんな組織を密かに運営しているなんて……

そう。おかしいことが続く。杉浦、前園、そしてその兄。偶然にしては出来すぎている気がする。

しかし、他に手も無く、私は元に戻った次元で前園の進む後に続いた。

「ここは……」

着いた先。私は目を見張った。何と、保健室であつたからだ。

「一年B組の北山さんですね？」

目の前に、前園と瓜二つの顔が並んだ。兄と言うから、似ていてもおかしくは無いのだけど、ここまで似ていると不気味な気がした。ただ、長髪で髪を後ろで結んでいるところだけが違う。あ、それと



身長もか……

その者は、保健室の住人。基い。保健室の先生であった。私が利用して無かったから、今まで知らずにいた。全くの初対面である。

「都築さんは、悪夢に取り憑かれたまま就寝中です。やはり、気になりますか？」

当たり前だろう！と言いたいところだけど、それはご法度。それに当たっているだけに、その事に関しては言葉が紡げなかった。仕方なく、今のありのままを説明した。

「これからの事も有りますし、事態の把握をしなくてはなりませんね？まず、悪夢開放の打開の鍵は、私に入った報告で述べると、プリンス候補生である者が握っているとの事。その辺りは、貴方達、秘密特別捜査隊？の方が詳しいと思われませんが？如何に？」

私は、話を振った。

「だから、プリンス候補生は……モガモガ……」

杉浦の口を、また前園が塞いだ。

全く何なんだ！言いたい事言わせれば良いじゃ無いか！不審げにその行動を睨み付けた。

「プリンス候補生は、名乗りを上げることが出来ない仕組みになっているのは、ご存知ですよ？勿論その側近も。暴かれた場合のみ有効。それに関しては、プリンス候補生に於いても同じはず。その辺りは北山さんもご存知のはずでは？」

前園兄は、そう言っただけ私の肝心な質問を却下した。それは、此処に居る私が恵様のどちらかがプリンス候補生だと見抜いているからである。

だけど、実際には、恵様がプリンス候補生だとバレていると思われる。それは私が尋常ならぬ態度をこの部屋で、杉浦の前で、一度取っているからであった。

それに、この一年間毎日、恵様の居眠りの際、無意識界を操作しているのに感じていたはずだ。同じアカンシャス・ワールドの生まれならば……気付いているはず。杉浦、前園両名についてそう認

識できた。

「ならば、私自身がその者を捜すしか他なりませんね？こういう事態であるのに、その情報源が無いとなると、これほど難しいことは無いのですが……？」

疲れている演技をしてみる。お涙頂戴の演技。こう言う時こそ女の強みを押し出す。すると、こう言う返事が前園から返ってきた。

「僕達は、秘密特別捜査隊です。とだけ言っておきますよ？でも、ここに居る者に、プリンス候補生が居ないとは言ってません。北山さんが暴かない限りは、それ以上のヒントを与える事は出来ませんしね？」

その言葉に、ふと、杉浦を見た。このアホ面が、プリンス候補生のはず無いし、前園なら有り得るけれど、こいつを突くのは難しそうだ。兄の方は、どう考えても有り得ない。

候補生は、十五歳の少年であるはず。今年度のプリンス候補生と同年齢のはずなのだから……

偶然のアカンシヤス・ワールド人との遭遇。そして、秘密特別捜査隊。本当に余りにも出来すぎている。ならば、やはり杉浦か、前園のどちらかだ。私は二人に絞り込むことにした。すると、

「わたくし達は、もう、気がついてますよ。プリンス候補生が誰であるのか？その辺りは、北山さん？聡明な貴女には理解できているはず。手の内はわたくしたちが握っているのです。でも、これを報告する義務は勿論ありません。そこまでわたくしたちは冷酷では有りませんから？」

前園兄はそう言った。ちょっと歯がゆいけれど、仕方が無い。これも全て私の落ち度であるのだから。しかし、一体何を考えているのであるうか？この者達は？

秘密特別捜査隊が聞いて呆れる。仕事はどうするってのよ！毒づきたかったけれど、冷静な表情を装った。そんな態度に出たら、恵様の品格を損なう恐れも有るし、見苦しい。私のミスであるのだから……

「そう、誰か判つていえると言うならば、今度は私が、誰がプリンス候補生であるのか？を、見定めれば良い訳ね？私は、杉浦くんか、前園くんのどちらかがそうなのだと思うっている訳よ。だったら、それを暴いてみせる！今日は、このまま恵様を保健室に預けておくわ。不安は有るけど、そうするしか出来ないし。これから、無意識界の秩序を上手く操り、地球での恵様の両親の意識改造を行わなければならないもの。では、ごめんあそばせ？」

皮肉タツプリに言葉を編<sup>あ</sup>んで、私は三名の前から姿を消した。この私を嘗めないで貰いたいわ。絶対、暴いてみせる！そう心に誓った。

無意識界の改造をした私は、自宅でこれからの事を考えていた。プリンス候補生。その特徴は何か無いものか？

プリンス候補生の場合、体のどこかに紋章が刻まれているのである。それは、生まれながらにあるものであるらしい。特に、ノウブル生まれの中に稀に。そして、それが後々プリンスの頭角を現すのだと語り継がれている。

恵様は、掌に赤い紋章が刻み込まれていた。時々アカンシヤス・ワールドでそれを私は拝見したが、古代文字特有で刻まれている紋章は、意味不明だった。でも、地球ではそれを消し去っている。それを目にしたら地球人は失神もしくは悪くして死を招くからだ。

大体、何故プリンス候補生が、地球に修行しに来るのか？その辺りも謎だ。アカンシヤス・ワールドと、地球の間に何か有るのであるのか？謎ばかりの秩序。でも、今はそんな事を考えてばかりはいられない。問題は、プリンス候補生を突き止めること！

「もし、プリンス候補生の方にも紋章みたいな物が有るとしたならば？何処に？でも、消しているとなると、私の力では探す事など出来やしない」

イキナリ思考が途切れてしまった。

とにかく今日は、お父上に連絡を入れて、それから休もう。この

一件どのくらい時間が掛かるだろうか？私の悪夢補給が出来ない体で、何処まで保つか？それを考えると、また気分が萎えた。

「恵様。私が何とかいたします。それまでどうか、お待ちください！」

夢の中、私は恵様の笑顔を見た気がした。

『プリンス候補生にも、プリンセス候補生同様、体の何処かに紋章がある。それを見る事が適うのは、同じ候補生のみ。いずれにせよ探し出すように。恵の意識回復を望む』

お父上からの返信はこれだけだった。全ては私に一任されている。しかし体の何処か？それが、掌とは限らないということなので、私は苦悩した。勿論、私はニィーディー生まれの単なる一般市民だ。プリンセス候補生などでは無い。隠されている紋章を探し出すことなど出来はしない。途方に暮れた。

でも、あの杉浦と前園のどちらかのはず！そう考えると、柄ではないが纏わりついてやろうかなと思うしかなかった。

「さて、行動有るのみ！」

私は、一人で高校へと足を運んだ。

「おはよう北山さん？」

早速、杉浦がホームルーム前の時間帯に私の席に来て接触してきた。何？この馴れ馴れしさ？昨日の今日というのにこの男はどういう神経しているのだろうか？でも、憎む事が出来ない笑顔だったから、私も仏頂面をやめた。杉浦のその表情がちよっとだけ、恵様に似ている気がしたのもあった。それに、そちらから接近してくれると私も仕事のし甲斐がある。

しかし、よく顔に傷作る男だなと思った。今日は鼻のてっぺんに絆創膏を張っている。

「おはよう。あなたはいつも元気そうね？」

「元気だけが取り柄だもんね！」

本当にその通りだ。なんて不覚にもクスリと笑ってしまった。

「今日はいつとは一緒じゃ無いの？前園くん。それにしても、いつも杉浦くんとはあんな感じなの？接し方の事だけどね……」

一言付け加えておいた。そうじゃ無いと、きつと理解できまい。

「霧人？うん。あんな感じ。って、でもあいつ悪い奴じゃ無いよ？俺がこんなだからしつかりしてるだけだと思う。あ、そうそう。霧人はお兄さんの所に行ってるよ？」

兄さんね。と言う事は保健室なのか。あ、今日はまだ恵様の顔を拝見してない。行かなきゃ！

「私、保健室に行くわ。恵様に会いに行かないと！」

こんな大切なこと忘れてしまってるだなんて、愚か者だ！と思い、私は椅子を腰で後ろに引いた。

「今は無理だと思うよ？無意識界の時空間、開こうとしてるから。」

霧人達は任務遂行中だもん」

「え？」

二人でコソコソそんな事をやっているとは。

「じゃあ、杉浦くんは何故此処に居るのよ？仲間なんでしょ！加勢しなくて良いの？」

そうだ。三人で行うことが普通なのではないのか？

「俺は例外。仕方ないんだよね……危険な目に遭わせられないからだって！面白くないな」っていつも思う！」

今度は、ブスツと膨れっ面。感情表現の豊かな奴だな。でも、これが杉浦の持ち味なのだろう。アイドル的存在になっっているのも判る気がした。

でも引つ掛かることが有る。何だろう？危険な目に遭わせられない？まるで大事にしているって事じゃ無いか。箱入り娘ならぬ箱入り息子……みたいな感じ？

でも、まさか杉浦がプリンス候補とは思えないので、やはり私はこの有り得ない考えを却下した。でも、気にはなる。

「時空間はいつ元通りになるの？」

「昼食には元通り。霧人も、その内戻ってくるよ。それにしても、都築さんがプリンス候補生だったなんてね？結構好みのタイプだったりしてただけ、嬉しいなへへ」

その笑いはなんだね！こいつって本当に能天気だな。待てよ？プリンス候補生で嬉しい？それって、プリンスになるべき人の言葉じゃ無いのか？

プリンス候補。プリンス候補。この両方ともが会おうべく出会いそして結ばれる。それは聞いた事がある。って事は、やはり、杉浦が？有り得ない考えが再び私の頭の中できると回り始める。

「杉浦くんは、嘘の付けないタイプだね？そうでしょ？」

とにかく、話を自分に都合の良いように振る。そうしたら、この杉浦はもしかしたら口を割るかヒントをくれるかも知れない。そう思った。

「うん。嘘は嫌いだ。コソコソするのも嫌いだよ」

だろうな。昨日あれだけ何かを言いたげにしていたのだ。そう言うところを突けばボロを出すに決まっている。正直者が馬鹿を見る。その良い例だ。今なら前園は居ない。なら、<sup>けしか</sup>喉ける絶好のチャンス！私は、改めて杉浦の顔をじっくりと見た。地球で言うところの狸みたいな顔をしているなってそう思ってしまう。

にしても昨日は確か、頬に絆創膏を貼っていたはず。なのに、その位置に傷らしきものが無い。どう言う事だ？これはファッションなのか？そう訝しげに見ていると、

「北山さんって、俺より遥かに大人って感じだよ？落ち着いてても、都築さんと仲が良いって事は、それだけ愛してるんだね？まるで、俺と霧人の関係みたいに」

そりゃ、主従関係なのですから。って事は、前園は杉浦の付き人？出来損ないのプリンス候補生にくっついてお供の者なのかも知れない？

ならば、判る気がした。私にとっては、恵様は神にも等しいから

敬愛しているけど、普通の付き人だったら？同じノウブル生まれ同士だったら？意見もハッキリ言えるだろう。信頼の仕方はそれぞれだ。

その事に気がついた私は、杉浦の鼻のてっぺんに有る絆創膏に素早く手を伸ばし有無を言わず剥ぎ取った。すると、そこには赤い古代文字の紋章が光るように有ったのであった。

「貴方が、プリンス候補生……」

呆気にとられた。そして、ハッと気が付きその絆創膏を元通りに貼り直した。地球人はそれを見てはいなかったようだ。良かった……  
「そ。俺がプリンス候補生。今有り得ないって顔に出てたよ？皆そう思ふのも無理ないよな」俺馬鹿だもん」

にっこりと笑った。まるで気付いて下さいつて感じだった。それが余りにも不自然だったけど、もう、私は気付いてしまったのである。

「俺は、道標ヒントを北山さんに授けたけど、教えてはいないよね？なら、問題なし。じゃあ、保健室に行こうか？これからが大変だよ？」

一杯食わされた気がする。無意識界の時空間を開いてるって一度言っただけなのに、この変わりよう。けれど、怒る気はしない。

私は、ゆっくりと立ち上がり、ホームルームの始まる予鈴のチャイムの中、保健室へと杉浦の後に続いたのであった。

### #3 アカンシヤスと地球

「よっ！霧人！」

「何しに来たんだ、お前は！危ないから来るなど言っていただろう！まだ、捜査段階だから……」

前園は、眉間に皺を寄せてキツと杉浦を睨み付けたが、私が杉浦の背後にいることに気が付き、息を吐いた。

「北山さんは、俺がプリンス候補生だって気がついたんだ。俺、教えてないからな！」

念を押すように言った。まるで説得に欠けるような念の押し方だな……とも思う。

「北山さん？気が付いたというのは本当ですね？厚史が言ったとかそう言うわけでは？」

沽券に係わるからそう問いかけてきたのだろう。でも、言った訳じゃ無いし、

「ええ、杉浦くんの言った通りよ。自分で気が付いたの。絆創膏の下にちゃんとプリンス候補生の印が有ったしね」

前園は溜め息混じりに、

「だから、そんな物で隠すなど言ったんだ。きちんと消せば済むことだろうに。案の定こんな事態になろうとは……北山さんには手伝ってもらわないといけませんね？こうなった以上……今、無意識界の時空を開いてます。スパイスは厚史。君だ！鍵は君が持っているけれど、その鍵が何なのか？それが判明していない。危険だけど厚史にも一度来てもらう事になる……」

その言葉に、ワンパク坊主發揮の杉浦は、

「おっシャー！そう来なくっちゃ！こんな所で一人燻ってるのって、俺嫌い！」

いとも簡潔に話は纏まった。がしかし、前園の私を見る目は厳しく感じられた。ま、それも仕方ないか？主従関係がハッキリしてる



だけに、こういう状況下に私がいるのが気に入らないのだろう。だけど、私だって使命が有る。アカンシャスと、恵様。この二つをきちんと正常な状態に戻さないといけない。

「では、開きます！」

前園兄は成り行きを見守りつつ一言そう言つて、無意識界の時空を開けたのであった。

無意識界。そこはアカンシャス・ワールドの様な暗闇の世界。そしてあちらこちらに点滅している多数の星々。それは満天の夜空といった感じだった。

時々浮遊している雲みたいな薄っぺらい霧。それを、悪夢と言うらしい。私は初めてこの目で悪夢を見た。しかし、時空は縦横広がっていてどちらに進んで良いのか判らない。それを補佐するように、前園兄が言った。

「悪夢が密集している場所を捜す。それが、一番先決である」

ま、悪夢が原因で、秩序が乱れたのなら、一番それが手っ取り早いであろう。そうだよな。って思つて私は、三人の後を追う。まるで浮遊した靈魂のよう。そんな気分だ。空間が上なのか下なのかさえ忘れてしまいそう。

そんな時、私は流れ行く霧の末端に触れそうになった。それを防ぐために前園が、腕を引つ張り上げた。

「馬鹿！これには触れるな！悪夢に取り込まれるぞ！」

乱暴なくらいキツク握り締められたその手は私の腕に幽かに震えているように伝わった。

「な、何よ！馬鹿だ何て！そんな言い方は無いんじゃない？」

でも、前園はその腕を引っつかんで着いて来いつて表情で私を見ていた。私は、何も言えなかった。それだけ前園の表情は険しかった。

「何さ……女生徒には優しいんじゃないの？」

ボソリと呟く。初めて言葉を交わした時から心がチクチクする。

この感情が良く判らないけど、私はこの前園が苦手なんだろうなってそう思うことにした。そんな時、

「霧人は、仕事の関係で悪夢と係わったお父さんを亡くしてるんだ。だから、キツイ事言ってしまうんだよ。別に北山さんの事が嫌いとかそう言うんじゃないから」

杉浦が私の耳元でそう囁いて、すくっと前園の横に並んだ。

前園は、私の腕を掴んだまま黙っていた。会話が聴こえている様ではなかった。

何さ、杉浦くらいもつと素直になったら？可愛げのない奴！とか思ってしまったけど、私も黙って前園の掌の温かさを感じたままこの無意識界のどんどん奥へと進んでいった。チクリチクリと心に何かが棘を刺す。

それから、どれくらいの時間浮遊していたのだろうか？私達は最終地点？では無かるうかと思われる場所まで到着したのである。

「この辺りは、密集してるけど？ここらで良いんじゃない？」

杉浦が珍しく、自分からそんな事を口走った。霧が濃く、もう行く手を阻んでいる。でも、此处で良いのであるうか？

「そうだな。もうこれ以上進むことが出来ないな。後は、厚史。お前の出番だ……」

前園は、そっと私の腕から手を退けた。私はチクリとまた胸が痛んだ。

「合点承知のすけ〜って言いたいところだけど……何をすれば良いの？」

素でそんな事をかましてくれる。いや、これは、始めから判っている事だ。私が突っ込むコトでは無い。だって、私にすら何をすれば良いのか判らないのだから。

「厚史？じっくり考えてみる？お前が鍵を握っていることだけは確かなんだ。でも、それが何かは僕には判らない。時間はまだまだ有るのだから」

前園は、真剣な表情でそう問いかけた。

「アカンシヤスって、何故地球と繋がってるのかな？俺今までずっと不思議だったんだ」

突然何を言い始めるのだろうか？私を始め前園兄弟は目を瞬かせた。

「だって、悪夢は、地球も含めて俺達が食べてる訳だろう？俺達って何？地球人の付録？それとも、地球人が俺達の付録？そうやって考えてると、俺達の存在意義が良く判らないんだ」

大真面目な話を始めてしまった。チンブンカンブんな事ばかり話してきた杉浦らしくないまともな発言。それに関しては、私も考えてきた。

一体何者なのか？

特に私の場合、悪夢も食べれない異端児である。そう言う子供で、親に捨てられた。その返答が、今この場所にいる前園兄によって紐解かれた。

「わたくし達は、地球人にとっての獺<sup>ほく</sup>である。夢喰らいと称されている物。そう、無くてはならない秩序。そして、夢を喰らい、生き長らえる事が出来る唯一の生物。人の形をしているのは、只の飾りに過ぎない。でも、アカンシヤス・ワールドは必要不可欠な物である。よって、わたくし達は必要である」

まるで機械みたいな口調で話していた。きっと、これが真実なのだろう。でも、何故、私みたいな子供が生まれたのか？

そう考えて、私はさかさず問いかける。

「では、訊きます。悪夢を補給できない子供が生まれるのは何故？私もその一人よ！」

私はどうしても知りたかった。悪夢を食べれない者が何故アカンシヤス・ワールドで生まれるのか。

「それは、軌道修正。悪夢を食べることだけが、わたくし達の使命

であると言つ事を覆す為に神が与えた試練。そして、今この状況下を打開することによって、アカンシヤス・ワールドは再生をします」  
前園兄は、まるで全てを知っているかの様にそう答えた。

「それって、悪夢補給無しで生きていくことができる世界を造ると言つ事？そんなの、アカンシヤス・ワールドである意味無いじゃない！……でも、そんな事どうして言い切れるの？神がそう言ったと？」

私は、激<sup>げき</sup>しそうな感情を抑えつつ前園兄に突っかった。それを、前園が制する。

「僕達の仕事だ。これ以上は、訊く権利は無い」

なによそれ！そんな納得出来ない説明で引けと？これって、アカンシヤスを揺るがす大ニュースだ！しかし、私は心の中で苦虫を潰すしかなかった。前園の顔が厳しいものに摩り替わったからだ。

「何はともあれ、後は、厚史に行動に起こして貰わないといけない。それが、この計画の重要なところだ」  
プロジェクト

前園は、切れ長の瞳を杉浦に向けた。何様のつもり？難題過ぎるのに、杉浦に全て任せるなんて……私はイライラしながら杉浦の行動を見守った。

「北山さん。悪夢、自分で補給出来ないんだね？あの……俺、思うんだ。これはもしかしたら試練なのかも知れないって。それは、全て仕組まれてて、俺と北山さんが偶然此处に居るって事も何かあると思う。で、考えたんだ。俺と一緒に来てくれる？保証は無いけど、試してみる価値はあると思うんだ」

杉浦は真面目な顔をしてそう言った後に、茶目っ気タップリな表情でにっこりと微笑んだ。そして、鼻筋に有る絆創膏を右指で摘むと剥ぎ取ったのである。

すると、その赤い紋章から辺りの闇を蹴散らすかのような光を拡散し、そして、霧の中に吸い込まれた。

「これは賭けなんだけど、俺と一緒に悪夢の中に付いて来てくれる？もしかしたら、何とかなるかも知れないよ？」

大きな瞳が瞼に包まれ、そして、私に手を差し伸べた。その表情が、恵様と被った。こうゆう風に笑う恵様。

「厚史、本気なのか！馬鹿な事は言うものじゃ無い！北山さんまで巻き込む事は……」

前園が、反論しようとしたが、私は、それを遮った。

「良いわ。その賭け乗ったわ！」

何故こんな気持ちになったのか？自分でも判らない。杉浦の言葉に惹かれたとかそう言う類でも勿論ない。でも、何かしら感じるのである。額の星型の黒子の辺りが熱く感じ始めている。私に何かすることが有るのかも知れない？と、何かが背中を押す。

「北山さん！本気か？考え直せ！君は関係ないんだ！それに、悪夢補給が出来ない体では絶対に無理がある！」

前園は頑として否定してようだった。でも、私はあの霧の向こうに行かなきゃならない気がする。何故？

「良いんだね？俺は行くよ？」

杉浦が私の右手を掴んだ。

私はその手をきつく握り返した。

「もう、後戻りはしたくないから。真実をこの目で！」

そう言った私の言葉で、杉浦は霧状の悪夢の中に飛び込んだ。私はその手を握り締め、少し遅れて飛び込んだのである。

遠くで、前園の声がくぐもった形で木霊した気がした。でも私は真っ直ぐ前を見て、この目で真実を見定めようと目を凝らしたのであった。

#### #4 悪夢の真実・絵夢の意義

何層にも重なった悪夢の中。そこは私が思い描くことの無かった世界が広がっていた。

黒々と、そして怪しい世界が広がっていた。人の悪夢。それは、様々有り過ぎて頭が壊れてしまいそうだった。

「悪夢。今まではどうやって補給してたの？都築さんから？」

余りにも気持ちの悪い世界に、戸惑い、吐き気がするその状態を察知したのか？杉浦は気を紛らわせるためか、問いかけてきた。

「ええ。そうよ……悪夢のエナジーだけを補給してきた。味って物を本当は判らないの。でも、恵様は、味があるってそう言っていた」

そう、悪夢の内容。そして、恵様がおっしゃる『味』というものが判ってはいなかった。今までその事に関しては感想も言えずにいた。でも、此処に来て感じたのは、どす黒い、腐った空気だ。

「人はね、悲しみ、怒り、憎しみなどのマイナス面を心のどこかしらに持っているんだ。でも、それをひた隠し生きている。そして、そのイメージを持って夢の中で生産する。無意識界は、自分でも判っていない事が多いんだよ。水面下で行われていることなど、判らないのと一緒にだ。でも、俺達アカンシャスの者は、それを食べてそして明るい無意識界を取り戻す。それが本来の使命なんだ」

饒舌に杉浦は話し出した。いつもの阿呆面が嘘のようだ。

「そう。でも、私には出来ない。何故？」

「それは、さつき霧人の兄さんが言ってた通りなんだよ。世界を変えようとしている神の悪戯。その結果、アカンシャスは人口が減った。もしかしたら、人間に、俺達に、警告を発しているのかもしれない。人の心の奥底。無意識への関心を勧めるために！」

今、何処からか若い女性の悲鳴が聴こえた。

「今の、何？」

「色んな夢がある。きつと、何かに追い掛けられる夢でも見てるのかも知れないね？」

私はガンガンと鳴らす甲高い警報で頭が割れそうな気分になった。悲鳴、嗚咽、怒鳴り声。様々な声が脳に届く。見ている映像も残酷すぎて、目が当てられない。

「恵様は、こんな夢を補給しているの？それを毎回私に……お疲れになるはずだわ？そうよね？違う？」

今まで悪夢を私の為と、自分の為に補給してきた。それを思うと、心がはちきれそうだ。

あ、だから杉浦はあの時、恵様を見て『疲れてるんだね？』と言ったのか？何も感じられなかった自分を、もの凄く恥じた。

「本当に、都築さんの事が好きなんだね？主従関係も色々だけど、北山さんは一味違う。自分を追い詰めることはないよ？都築さんも君にちゃんと大切な物を貰ってるはずだからね？」

何を？私は何もして差し上げてない。私は只のお荷物だ。そう思うと、目から水が流れ落ちた。これは何？私、泣いているの？悲しいの？悔しいの？

母に捨てられても泣いたことなど無い。でも、今私は涙が零れてそれが止まらない。

「人はね？信じられる事が大切なの。でも、それは依存で終わってしまっただけじゃないと俺は思うんだ。笑って生きなきゃ！」

杉浦の言葉が胸に届く。こいつがいつも笑っていられるのは、それが大切だからと知っているからなんだと判った。

「俺ね？都築さんを、教室で時々眺めてたんだ。心の豊かな子だなって。そして、プリンス候補生だと知ったのは、廊下ですれ違った時、掌の紋章が見えたから。都築さんは、始めから知ってたはずだよ。俺がプリンス候補生だって。だって俺の場合、顔に移動する紋章を絆創膏で隠してるだけだったからね」

そして一息入れる、言葉を紡いだ。

「でも、彼女は近づかないようにしてた。常識のある子で、とても

好印象だった。同じ高校の同じクラス。まさか、あの場所で出会うなんて思っても無かったけどな？」

杉浦の話の聴いていると、周りの雑音や映像が吹き飛ぶ。これが、次世代を担っていくプリンス候補生の力？馬鹿なだけじゃなかったんだ。学問への執着心は無くとも、きちんと大切な学ぶべき事を学んで、育ってるのだと理解した。私は、杉浦を見直した。きっと素晴らしいプリンス、そして、頂点に立つ王になるであろうと確信した。

「さて、この先が最終ラウンドだね？ここから先は、死を覚悟しないといけないかも？」

杉浦は、ギョツと力強く私の手を握り締めた。私はハッと前を向いた。目の前に立ち塞がる大きな黒ずんだ扉が有る。そして、その前で、停止した。

「これが無事終わったら、都築さんに伝えるよ。俺の本当の気持ちだから生きて帰らなきゃな？」

「どうせなら、お目覚めのキスでもして差し上げたら？眠り姫のように」

私は付け加えた。そして、クスリと私は微笑んだ。杉浦なら、大丈夫。恵様とお似合いだ。そして、心から賛成できる。

恵様？貴女は大変価値のある物を得られますね？そう心で唱えることが出来たのである。

それから、目の前の重い扉をこじ開けようと私と杉浦は力を合わせて押した。しかし、ビクともしなかった。

「何だ？この扉は？開かない……」

杉浦は、浮遊している体なのに、その場で胡坐をかいて、髪の毛を掻き毟って考えていた。私もこの先に何か隠されていると思っている。なのに此処で足を止められて、イラついた。

「何かが足りないのか？それとも多いのか？それが何なのか、俺には判らないよ……」



杉浦の気持ち判らないわけでは無いけど、此処で頑張つて欲しいものだ。ちよつと他力本願。でも私に関係するものは何かある？ そんな事を考えながら暑さを感じ、汗ばんできたような気がする自分の額を拭いた。

すると、一筋の光が扉の一点に当たった。

「え？」

何やら、鍵穴のような物がそこに有った。

「杉浦くん……あれ……！」

私は素早くそれを指差した。

「何？」

小首を傾げて杉浦はそれを見た。光は消えてしまい、鍵穴は消えてしまった。

「鍵穴じゃないかな？ さつき幽かに見えたのよ……」

私は、直ぐに消え去った光が何だったのか

？をもう一度考えて、さつきみたいに、額に手を持っていった。星型の黒子のある額。これが何か関係有るの？ そう疑問に思った。そして、前髪を掻きあげてさつきの光を望んだ。

すると、光が再び一直線に放たれた。私はしっかり額の下にある黒子を露にしたまま前髪を押し上げていた。

「ほら、あれよ！」

と、杉浦に指し示した。すると、杉浦にもその鍵穴が見えたらしい。早速その鍵穴に近づいて行つた。勿論私も後を追つた。

その鍵穴は、私の背丈よりも少し高い位置に在った。そして、杉浦は、私より背が低いので、背伸びをして目を凝らしていた。

そして、その鍵穴の下に何か文章が書かれてあることに気が付く。「何て書いてあるのか、私には読めないわ！ 何が書かれているのかしら？」

そう、その文字は古代文字で、紋章と同じ様な文字であつた。

「うーん。俺には見えないんだけど……」

その見えないというのは、背が足りないから？ それとも読めない

という意味？

「悪いんだけど、北山さん、肩車してくれる？」

おいおい。仕方ないな〜って思いはしたが、もしかしたら、杉浦には解読出来るのかも知れない。そう思うと、私は、浮遊しているその場で杉浦に肩車をしてあげた。思ったより軽かった。それは、重力が無いからかもしれない。

「判ったよ。北山さん！そのまま居てね？どうやら、鍵は俺の紋章が関係してるみたいだ！」

頭の上で理解した内容を遂行すべく、杉浦は肩の上に足を乗せて立ち上がった。すると、丁度鍵穴の部分に、紋章の光が走った。

『ギ~~~~ツ』と重くてどうしようも無かった扉が開く。

「杉浦くん！開いたわ！」

私は嬉々としてそう言った。杉浦は、すぐさま私の肩から飛び降りた。

「鍵は、俺の紋章だったんだね。でも、この先何が有るか判らない、気をつけような？」

につこり笑って、でも、心配りしてくれるのがあるのがありがたい。そして、私も役に立ったと思うと嬉しく感じられた。

私と杉浦は、その先に進んだ。中は光に満ち溢れた、花々が辺りに咲き乱れ、小川のせせらぎが聴こえる。まるで、思い描いたような天国かと思える景色がある不思議な世界だった。

頭に神々しい輪っかに乗せた天使たちが戯れ、妖精が花の蜜を集めてたり。周りはタンポポの綿毛のような白い景色のように明るく、そして賑わった世界だった。今までの悪夢でどす黒かった空間はそこには無かったのである。

「心地が良い……のは良いのだけど、ここが、悪夢の果てなのかしら？」

大変危険な地帯が待っているかと思っていたのに、ちょっと、拍子抜けした気分。

そんな事を思っていると、一人の天使が私と杉浦のもとにやって

来た。

「ようこそ。この地でお待ちしておりましたよ。お二方」

待っていた？何故？

「アカンシヤス・ワールド再生の為ですよ？その為にあなた方もいらしたでしょ？」

何も問いかけてないのに、勝手に答えを導き出してくる。それが不思議だった。そして、理解した。あ、そうか。神が起こした悪戯。その答えが此処に有ると言う事なんだなと。

「この地は聖地です。悪夢の影に隠れて、良い夢が見られますように。という気持ちで籠った場所。そして、此処に辿り着いたあなた方には、一つの夢をお渡しできる。言うなれば、願いの場所でもあります」

「願いの場所？」

杉浦と私はお互い一緒に口走った。

「ええ。それが此処に来た者達の、特権。そして、神の意思」

そう言われて、私は勿論考えた事は、アカンシヤスと、恵様の事。杉浦に目配せすると、杉浦も、解かっけると言った表情で頷いた。

「では、お願いがあります。アカンシヤスの存続を。全てが在るがまま……元の姿に戻る事を願います」

私は、そう言った。杉浦もそれで良いと笑った。

すると、何処からか高らかなホルンの音が鳴り響いた。私は吃驚してその音の鳴る方を見た。そこには、大きな大理石で出来た銅像の大男がホルンを鳴らしていたのである。

そして、ホルンの先から、古代文字の形をした物がフワフワと音と共に広がった。

「これで、願いを聞き届けました。貴方達は元の世界に戻りなさい。此処は、死の世界でもあるのです。生きている者の居るべき場所ではありません。さあ、あの大樹の元に行って、その下にある穴から出るのです」

天使は透き通るような声で優しくそう言った。私達は、天使が指

差した大樹に向かって歩いた。そして、穴の中に身を投じたのであった。

穴の中は、滑り台のように坂になっていた。

私と杉浦は、勢い良くそれに飛び込んだ。結構長い間滑っていた気がする。でも、私は満足していた。これで、アカンシヤスも、恵様も元の通りになる。そう思って意気揚々としていた。

そして、元の場所。前園兄弟の居る場所へと戻ったのであった。

「ただいま~~~~!!」

空間が擦れ、私と杉浦は丸い穴を開けて戻ってきた。それを驚いた表情で前園兄弟は、見ていた。

「任務遂行終了！これで、アカンシヤスは元通りだ！」

杉浦は嬉しそうに微笑んでから、前園にガッツポーズして飛びついていた。前園は、

「それは良かった。でも、確認しに戻らないといけないだろう？此処では判断できないからな」

実感が湧いてない様子であった。それもそうだ。ここにずっと居たのだから。あの場所で私達にあったことなど判るはずも無いのだから。

「どのくらい時間掛かった？俺達、時間の感覚が無かったから……暇だったか？」

杉浦は、帰りの道中、横に並んで前園に問いかけていた。私は、最後尾でそのやり取りを聞いていた。霧のある場所を避けながら。

「此処での時間は、あやふやだからどうだろう？でも、かなり時間は経っているだろと思われる」

前園は、それを気にしてないように言った。

「それより、北山さん？体の調子が悪いとか、変だとか、そう言う事は無い？」

突然、話を振ってきた。それも、私の顔を見ることもしないで。だから私は、問いかけられたことに始め気が付かなかった。

「北山さんってば〜！」

と、杉浦が振り返って私の腕に手を回してきて始めて気が付いたのである。

「体調大丈夫かって？霧人が訊いてるんだけど？大丈夫？」

ちよつと心配そうに杉浦は問いかけた。

「え？あ、うん。平気だけど……」

私は、どうも前園のことに關しては上手く言葉が紡げないでいるみたいだ。

「霧人〜心配だったら、ちゃんと顔見て問いかけろよ〜！」

「え？」

そう言えば、違和感があつたのは、前園は、私があ場所から戻つてから一度も目を合わせて話してないからだと気が付いた。別に私の顔を見たくないのなら良いのだけど？でも、また、チクリチクリと、胸が痛い。何なのよ。この痛みは？考えようとしたけど、その前に前園が、

「それなら良いんだけど……」

興味が有るのか？無いのか？判らないように言葉を濁していた。

私はちよつとムツとした。何なのさ！ハッキリしてよね！って、なぜ怒らなきゃならない？また、自分の感情が良く判らない。でも、腹が立つたから仕方ない。それがどうしてなのか？それを考えることなく、私は釈然としない思いを抱えていた。

帰りは、すんなりで行つた。霧はまばらで、行く手を阻むことは殆ど無かつた。先に大変だつたからそう思えるのかもしれないが……でも、あとは、無意識時空を地球に繋げるだけ。でもその事に時間が掛かつた。

「なあ、ポイントは此処だつたんだろ？何故直ぐ帰れないの〜？」

杉浦は、全く判らん！と言いたげに、前園兄弟がやっている行為を見ながら、空間に胡坐をかいてブツブツ言いながら浮遊していた。それもそうだよな？恵様に会いたいだろうし？私は隠れてクスクス

笑っていた。

「時間軸が今までと違うからだ。少しは落ち着いて黙ってる！」

本当にこいつらの主従関係って変だ。前園も苛立っているようだけれど、それをそのまま感情に出さなくても良いだろうに？私はそう言う二人を見てまた可笑しくなった。

にしても、どれだけ時間が経っているのだろうか？この分だと一日は過ぎてるだろうな？って感覚だった。私が恵様から悪夢補給せずに二日位か……でも、思ったより頭の中はスッキリしている。けれど、そんな平和ボケをしている次の瞬間、私の脳に激痛が走ったのである。

「痛い！」

熱く額に突き刺すような激痛を感じた。体を九の字に曲げてこめかみに手を当て私はこの感覚に対応しようとした。誰か！

その様子に、

「北山さん！」

と、暢気に構えていた杉浦が私に気が付きあたふたとやって来たけれど、それに気を掛けることが出来ない程、私は余裕が無く、ガンガンと響く頭の中に気が集中していた。

「まさか、もう一週間が経ってるなんて事は！」

前園が私のところにやって来たみたいだった。でも、

「い、痛いー！」

私はそんな事を知ることなく蹲って頭を抱えていた。こんなに響く頭痛は、あの時、母に捨てられた時以来だ。その内、意識がままならなくなつて、脱力感が出るだろう。でも、どうしようもない。ここにいる者達がどうこう出来るものではないのだから。私このまま死ぬのかな？

そして、私は意識が遠退くのが判った。そして気を失った。

夢の中、耳元で聴いた事がある音楽が流れている気がした。それは、あの天国のような場所のホルンの音色。音色がとても澄んでいて気持ちが良い。そして、私は目を醒ましたのである。

「気が付いたかい？」

前園が、至近距離で私を見下ろしていた。よく見ると、私を抱きかかえていた。

「お……重いわよ。私！下ろして！」

思わず動揺して、私は前園から離れようとした。しかし、前園はその言葉を無視してしっかり抱え上げると、私を何処かに運ぼうとしていた。

「気分はどう？」

「え？あ、うん。平気みたい……」

そう言えば頭の疼きが無い。一体どうして？

「悪夢取り込んで置いて良かったよ。厚史は、こう言う事には慣れて無いしね？」

どう言う事？じゃあ、あの頭痛は、悪夢補給が出来てなかった為に起こった事なの？そして、前園がその受け渡しをしてくれたってこと？私は顔から火が出る勢いでカッとなった。でも、そんな様子に気が付かないのか、

「時空間の暇な時間で、睡眠とっておいたんだ。もしもの事があるに困るしね？でも、厚史から聴いた話だと、何かがおかしい気がするんだけど。北山さんは、全てが元の通りに戻るように！って願ったんだよね？それなら、こういう悪夢が取り込めないアカンシヤス人がそのままでいることは変だと思っただけ。どうしてなのだろうか……？」

そんな事判る訳ないでしょ！ちよつとそれより下ろして欲しいんですけど！間近で前園の整った顔を見るのが凄く不自然だったし、恥ずかしかったから。何故、恥ずかしいの？私……その答えは未だ出なかった。

「それより此処は……」

どう考えても、あの時空間ではないのは、見て明らかだった。明るい世界。

「ん？此処は地球だよ。もう、時空間は開いて、元の世界に戻った所」

前園はフツと笑った。

「都築さんに会いに行く？もう、目が醒める頃だと思うよ？厚史はさっさと行っちゃったけどね？」

今度はクスクス笑っている。あ、前園も判ってるんだと思った。杉浦が、恵様の事を想っている事に……私は直ぐに判った。

「私も恵様にお会いしたいわ……」

お顔を見たい。そう。改めてお話もしたいとも思った。

「良いよ。じゃあ、行こう」

前園は、私をそのまま抱えてベッドへと向かった。数歩の所で前園は、ベッドのカーテンを開いた。そこには、恵様が微笑んでいたのが目の端に映りこんだ。私は依然として前園の腕の中で抱えられていた。

「絵夢！」

恵様は私に気が付き、笑顔で名前を呼んで下さった。それで私はホツとした。ちゃんと生きてらっしゃる。

「あら、前園さんと一緒にいたの？絵夢も隅に置けないわね？」

茶化してらっしゃるのか？恵様はコロコロと笑った。

「無意識界の時空間で一週間くらい、悪夢補給が出来なかったから、霧人が都築さんに代わって分け与えたんだよ。でね、霧人の態度凄かったんだ。あんな顔見るの、どれだけ振りだろう？ね、霧人？」

杉浦まで、ニタニタ笑って私と前園を交互に見た。何よ！その笑いは！私は杉浦にキツと視線を送った。しかし、杉浦は逆に笑ってウィンクをした。一体何のつもりなのだろうか？

「前園くん。もう大丈夫だから、下ろしてくれろ？」

私は、もう大丈夫。恵様の顔も見ることが出来たし。そう思ってた。言った。

「あ、うん……」

前園は、少し躊躇いがちにそう言って私を下ろしてくれた。それ



を見て、恵様は変な顔をされた。杉浦にいたっては小首を傾げている。何なんだ？この反応は……私には理解できなかったけれど、とにかく、恵様の手を握り締めるために近寄った。

「ご無事で何よりです。恵様！」

私は、横になってらっしゃる恵様の手を取りそう言った。ああ、恵様の体温がここにちゃんとある。

「絵夢も、ご苦労様！それにしても、皆で時空間旅行か！良いなあ。あたしも行きたかったな」

「何を馬鹿なことをおっしゃるのですか！そんな危険なことは許されませんよ！私だから許される事ですから。それでは、お父上とお母上にご連絡しておきますね？きっとホッと安堵なされますから」

私は、事の次第を全てありのままを文章として報告した。それをするのが私の使命。それにこれは、嬉しい知らせでもあるのだ。すると、こんな返事が返ってきた。

『ご苦労。全てアカンシヤス・ワールドは元の通りになった。悪夢を受け入れることが出来なかった者達も、この世界できちんと悪夢を自らの手で補給し生活できるようになり、我々は安堵している。全ては、絵夢の働きにもある。ありがとう。では、恵と共に帰還する時を楽しみにしている』

こういう内容だった。

「ちよつと待って？これはどう言う事なの？

悪夢を食べれない者達が、悪夢を自ら補給出来るようになったと言うのは……」

私は、一回読んで始め気付かなかったからこの状況を良かったとは思った。しかし、二度読み返しあることに気が付いた、自分は悪夢を補給できていない。なら、私は何？

「絵夢？それはね……あなたは地球人と、アカンシヤス・ワールドを繋ぐハーフだからなのよ……」

恵様は笑うことなく、滅多に見せない真剣な表情でそうおっしゃった。それは、どういう意味なのですか？私が、地球人と、アカンシヤスのハーフ？そんな事有るはず無いじゃないですか？

思わず動転して、私はよろめき近くのパイプ椅子の脚で躓きそうになった。

「信じられないのも判るわ。でも、それは真実。目を背けることが出来ないことなの。今までひた隠しにしていたことなのだけど、あたしがあの時、絵夢を拾ってからずっと内密に調べてたの。あなたのお母様にもお会いしたわ。そして、真実を知った。貴女は間違はなく、地球人と、アカンシヤス人との間に生まれた子供なの」

お母さんに会った？恵様が？いつ？そんな事今まで知らなかったし、気付かなかった。

「何故隠しておられたのですか？おっしゃって下されば、私だって

……」

私だって、何？その後の言葉は紡げなかった。

私は、恵様がいなければ、今ここにいることさえ出来なかったはずだ。それなのに何を言おうとしていたのだろう……そう、気持ち

が沈んだ。

「お母さんは、アカンシヤス生まれのはず。なら、お父さんは？妹が居たのにお父さんが違ったの？私は不義の子供だったの？そんなの……」

そうなのだ。私はお父さんの子供じゃ無い

！って事になる。それでも、お父さんは何も言わなかった。どうして？確かに、父の私への干渉は少なかった。

でもいくらなんでも、そんな事は……ニイーディー生まれだからといって、許されない事だって有る。それでも、お父さんは何も私に言わなかったし、お母さんも何も言わなかった。そんなの信じやない！仮面家族だったの？私達の家族は！

たった三年。その内一年は記憶に無い。赤ん坊過ぎたから。でも、その後の二年は、ちゃんと今でも覚えている。お母さんの笑顔。私

は忘れた事なんてない！捨てられても、私は本当に恨んでなんかいなかったのに！

今は、恨みが籠ってしまふ。何故、私を生んだの！今この場でその真実を明かして欲しい気分だった。

「恵様は、全てをお知りになってらっしゃるとおっしゃいましたね？私の母から真実をお聞きになったと」

私は、知らなきゃならないのだと自分で思った。私は、一体何なのか？

「絵夢のお母さんは、ノウブル生まれのプリンセス候補生だったのでも、この地球で恋をして、その方と結婚してしまった。そして、絵夢、貴女が生まれた。勿論、反対したそうだが、家族の者達は……それもそうよね？仮にもプリンセス候補生。でも、貴女のお母さんは、駆け落ち状態で逃げ回った。しかし、不慮の事故で愛した人を失った。絶望したお母さんは、もうどうしようもなくなつてアカンシヤスに帰った。ノウブルという肩書きをも捨てた。そして、今の旦那さんと住むことになった」

私は真実だというその話を、呆然と聞いていた。お母さんが、ノウブル生まれのプリンセス候補生だった……そして、駆け落ち状態で、この地球で愛した人と結ばれ、私は生まれた。それを聞いて、動揺を隠せるはずが無かった。

「それが真実……でも、他にも悪夢を自分で補給できない子達が居たわ！それはどう言う事？変じゃない！」

私は敬語も忘れてしまっているほどに興奮してしまっていた。それほどにもう、何を信じれば良いのか判らなかつたみたいだった。

「それは、神の悪戯。北山さん達親子の事が明るみになるのを避けたかつたから」

杉浦が言った。

「じゃあ、ノウブル生まれの母だったら、高い薬買わなくても、私に補給できたはずじゃ……？」

「それは、肩書きを捨てた＝剥奪。と同じことだったからよ。そし

て、絵夢のお母さんの兄妹親戚とも縁が切れてしまっていた。でも、教えて貰ったの。あなたの従兄弟が……この前園霧人さんであることを……」

恵様は、一瞬間を空けてそうおっしゃった。

「前園くんが……私の従兄弟……？」

つまり、血のつながりがあると言う事である。

私に従兄弟がいるなんて考えてもいなかった。それじゃ、前園を見るたびにチクリチクリと胸が痛んだのはそのせいだったの？どこかで繋がっていたから、そう感じたとしても言うの？

頭が余計混乱した。余りにも沢山の信じることの出来ない真実を聴いたために私はパンク寸前だった。

「北山さん？さっき、僕はこう問いかけたよね？『北山さんは、全てが元の通りに戻るように！って願ったんだよね？それなら、こういう悪夢が取り込めないアカンシヤス人がそのままであることは変だと思っただけ。どうしてなのだろうか……？』って。一応、考える時間をあげたつもりだったんだけどな？」

判りづらかったかな？」

前園は、ちよつとハニカミながらそう問いかけた。と言う事は、前園は全てを承知で私を気に掛けていた訳だ。

私は、その場に膝を着いた。立っていることが出来ないほど、ヘロヘロだった。知らなかったのは、私だけだったのか……

「て、ことは……恵様が、アカンシヤス・ワールドに戻らないって言ったのは、もしかして……？」

私は、床にへたり込んだまま恵様を見上げた。すると、恵様は、「ちよつとした悪戯よ？笑えるものじゃなくて申し訳無かったんだけど、一度真似して言うてみたかったの」

ああ、もう降参。私の負けだね。

「でもね、絵夢のお母さんから、手紙を預かってるわ。帰ったら読んで御覧なさい。あたしは封を開けてないから、安心して？それからあたし、絵夢のお母さんを尊敬してるの。多分、アカンシヤスの

誰もが尊敬してと思う。確かに、母として絵夢を捨ててしまった事は、取り返しのつかない罪かもしれない。でも、人として、時空を超えた愛を貫いた勇気があった事を誇りに思ってるのよ？それは判ってあげてね？」

そう言つと、ふと恵様は保健室の壁に貼つてあるカレンダーを見た。

「明日、終業式ね？アカンシヤスに戻るのね？あたし達……」

短かった一年がもう過ぎ去ろうとしていた。そして、この恵様と杉浦のそれぞれの候補生としての修行の時間も終わろうとしていたのである。窓の外では、チラチラと綺麗なピンク色の季節には早い、桜と言つ花びらが舞っていた。

## #5 永遠の愛

「おゝよく戻ってきたな！恵よ！大きくなって！」

おいおい。身長は変わってませんで、お父上様……立派になつての間違いでは？

あの日以来、私は恵様に対してちょっとした悪戯心が芽生えてきたみたいだ。何だか、お笑いの上での突っ込み役？みたいなものである。こう言うのも悪くない気分だ。

そして、私に宛てた、母からの手紙という物を読んだ。

「これがそうよ？」

帰った早々、恵様から手渡された。

私は、ペーパーナイフで、真つ白な封書の先にナイフを入れる。

それにはこんな事が書かれていた。

『<sup>あい</sup>愛へ

これを読んでいると言う事は、全て恵さんから事の次第を聴いた後だと思 います。私は、貴女を捨てた、悪い母親。それなのに、こんな手紙を残し てしまうなんて、情けないことだと思つわ。でも、どうしても、私の言葉 で伝えておきたかったことが有るの。それは、私が、愛した貴女のお父さ んの事。本当に心から愛していたわ。優しくて、気品があつて、そして、 ちよつと粗忽者だっただけ。 （お墓は、この場所にあります。もし地球に 行くことが有るならば、行つてみて下さい。その方が、貴女の本当のお父さ んの眠っている場所です）亡くなって、私一人で貴女を育てれば良かった とも思つた。でも、私には経済力というものが無かつた。そう、だか ら、アカンシヤスに戻つた。階級を剥奪され、それでも、次に出逢つた方 と結ばれた。私はいつでも本気に人を愛しているわ。それは本当。貴女に は、こんな苦勞はさせたくは無 いけれど、でも、愛の本当の意味は忘れな いで欲しいの。こんな馬

鹿な女に言われたく無いかも知れないけれど、人を大切に、そして、愛せる子になって欲しい。だから、私は、貴女に、愛という名前を付けた。今は、もう違う名前を名乗っていることでしょう。でも、忘れないで欲しい、こんな私が居たことを……

（追伸）私を捜すことだけは決してしないで下さいね。私は、このアカン シヤスの何処かで、貴女の幸福を祈っています』

最後の方は、涙で幽かに濡れた跡で、文字が滲んでいた。それでも、私には解読できた。

「お母さん……」

私は心の底からこの時、母の事を想い、泣くことが出来た。愛されていたのは本当だったのだと。

それからと言うもの、忙しい毎日を送っている。それは、恵様がアカンシヤスでプリンセスとしてのまた一段階上の修行が始まったからだった。

今は、各ノウブルの方々を交えた交流会が主。その際、いつも恵様は杉浦の姿を追い掛けてはいつものように朗らかに笑っていらっしやる。

もう、この二人の仲は揺るぎの無いものようであって、沢山のノウブルの者達の間で噂になっている。

杉浦はというと、今になって貫禄あるくらい背が伸びていた。あの頃は私よりもちびっ子だったくせに！時々私は、

「いつ結婚するの？」

何て意地の悪い事を問いかけてしまう。それなのに、杉浦ってば、「うん。恵ちゃんが、結婚できる歳になったらね？」

って、恵ちゃん呼ばわりで……もう、殆ど新婚カップル誕生のようだ。だから私は、こう言ってみる。

「貴方が、ちゃんとしたプリンスになったら。の間違いじゃなくて？」

すると杉浦は、大笑いしてこう言った。

「俺は、直ぐにでもプリンスになるよ！その目で見ててくれよな！俺、嘘つきは嫌いだから、ちゃんと有言実行してやるさ！」

ふんぞり返ってそう言った。

「所で、北山さんは？霧人とはどうなの？」

ああ、また出たよ……この台詞。

このところ、杉浦はやけに前園の事をほのめかしてくる。従兄弟同士でも、この世界ではなんら問題は無い。けど、どうなのだろう？まだ私の心は傾く気配は無い。でも、杉浦の質問に否定の言葉も出ない。実際自分でどうありたいのか？が判ってないのだと思う。杉浦の側近のはずなのに、前園の姿が無いのも、ちょっとは気になっていたりするけれど、だからと言って、何故？何て訊けないし……

「あ、霧人なら、地球にいるよ？」

あ、また心を読むような事をして……実際何を考えているかなんて判るはずも無いのは判っているけれど、杉浦は、勘が鋭いから判ってしまうらしい。

「お兄さんの手伝いだよ。霧人は秘密特別捜査隊志望だから。あっちも大変みたいだな〜手伝いに行ったら？」

う……そんなこと出来る訳無いだろう！ムツとしていると、

「じゃ、俺、恵ちゃんのところに行くね〜」

何て調子が良いやつ！

「でも、憎めないんだよね〜」

私はボソリと呟いた。

前園の事も考えながら過ごした一週間後の社交界。私は恵様の側近として招かれ、いつもの様に各人と会話を交わしていた。するとそこに杉浦がバタバタとやって来た。余りにも言葉に出来ないような形相だったので、私は何事が起きたのかと、恵様のところに駆け寄り、そして、一部始終を聞いた。

「霧人が、危篤らしい！無意識界の時空間で、悪夢にやられた！」



私は、え？という表情を作る間もなく、

「何ですって！今は何処に！」

問いかけてしまっていた。言った後に、心臓がバクバク言って鳴り止まない。こんな事態になっているなんて知らずに、私は此処で何をしているのだろう？前園の顔が頭の中に浮かんだ。

「気になる？」

って、杉浦が言った。お前は、こんな非常事態に何を訊いているのだ？しかもお前冷静だぞ、その顔！

「気にならないわけ無いでしょ！あんたの側近なのでしょ？それなのに、その落ち着いた表情止めなさいよ！」

私は非難した。すると、

「俺は、霧人の主人だけど、あいつは今の仕事に従事してるわけで、どうなるうと、それは霧人の天命。だから……」

言い終わる前に、私は杉浦の右頬にパンチ一つ繰り出していた。

杉浦は、思いつき後ろに吹き飛んでいた。

「何処なの！言いなさいよ！これ以上話したく無いわ！あんたの顔も見たくない！」

私は、杉浦を見下ろす形をとってハアハア肩で息を付いていた。

「……地球の、あの学校の、保健室」

「判ったわ！じゃ！」

私は踵を返すと、すぐさま地球へ降り立つための時空間の港へと向かった。杉浦が、頬に手を当てて恵様に抱き起こされながら、舌を出して笑っている事にも気が付きもせずに。

「前園くん！」

時空間を超え、私は再びこの場所に来た。頭で何も考えられない。こんな気分初めて味わっている気がする。

保健室の、奥のベッドのカーテンが閉じていた。私は、そこに前園がいるのだと確信し、ソツと開いた。

前園らしき人が横たわっていた。

「前園！聴こえる？生きてる？」

頭まで深く体を潜り込ませているため、表情が判らない。私は、布団からはみ出していた手を握り締め、もう一度呼びかけた。ただ返事が無い。

「嘘！ちよつと、冗談じゃ無いわよ！私を置いてさっさとくたばらないでよ！私はあんたが好きなんだから！」

言った後、ハツと気が付いた。私、前園こと好きなんだ……と。すると、後方から、ドアが開く音がした。

「ふん。北山さんは、兄さんが好きなんだ？」

一瞬ビクツと体が引きつった。その声は、前園？じゃあ、ここに寝ているのは……？

「うん。眠いんですが。何でしょうか？」

私がしっかり手を握り締めているのは、前園兄だった。布団から這い出てきて、私の顔を眠たそうな目で見ている。

私の顔から火が出た。文章にならない言葉が炸裂。

「前園兄？え？私、前園が危篤だって、杉浦が……」

何言ってるんだ？もう、どうしよう！こんがらがった。視界がクルクル回っている。

「ごめん、ごめん。厚史がまた何か言っただろう？でも、まさか、北山さんに告白されるとは思ってたな？」

前園は、ちよつと赤くなって私の横にあるパイプ椅子に腰を掛けた。

「え？告白とかそう言う類じゃなくて……その、今日は天気良いね？」

何を誤魔化しているんだろう？口からでまかせじゃ無いのは判っている。私は、心のどこかで、前園の事を好きなのだと自覚して、そして、気恥ずかしさに戸惑っている訳であって……

「今日は、良い風が入ってくるよ？」

「……そうだね」

話を合わせてくれたらしい。二人して、並んでパイプ椅子に座っ

た。保健室の窓から入ってくる風が心地良かった。でも次の前園の台詞で、私はまた現実に戻された。

「でも、僕から告白しようって思ってたのにな？全く、厚史の馬鹿が！」

「……え？」

お互い目を合わせて見詰め合ってしまった。

「相手から告白されるより、僕は自分から告白したいんだ。今の聴かなかったことにしても良いかな？」

目を伏せて、いつもの前園らしくない表情で……私は、思わず、  
「あはは、良いわ。言わなかったことにするから！ごめん！」

思わず謝ってしまった。私も前園に吊られて視線を落とした。

少し沈黙の時間。それは空気の流れが聴こえるだけのまったりした時間だった。

「あの！」

二人して同時に言葉を発した。

「あ、何？」

「え、前園くんから……」

お互い譲りながら、結局、前園が切り出した。

「僕が、一人前の秘密特別捜査隊になったら、北山さんにプロポーズするから、それまで待ってて貰えるかな？待てないとかだったら、仕方ないけど……」

「……え？」

私は、心の中で同じ言葉が羅列した。それを言葉で編んだ。

「大丈夫。待ってるわ」

私は、しっかり前園の目を見て言った。

「あ、それと、手。他の誰にも握らせないでくれないかな？厚史との時も感じてただけ……？僕はまだ握ったこと無いんだから」

前園は、端正な顔を綺麗に微笑んだ。

空気は二人の世界。それに割り込んできた声。

「ところで君達……わたくしの存在忘れてないだろうか？」

頬杖を付いて横向きに私と前園を見ている前園兄。

「あ、悪い！」

前園は、居たの？って表情で見ていたけれど、私は驚いて、思わずパイプ椅子からずり落ちそうになった。

「じゃ、未来の妹に何かして貰おうかな？」

何て思ったりして？」

同じ顔が、微笑んでくれたので、私は引き吊りそうな顔を戻して、「違法じゃ無いことなら何でもおっしやって下さいな？お兄様？」

三人揃って、爆笑した。

それから、半年経った。

私は、恵様の元で側近として働く合間に、無意識界の勉強を行った。あの時言った前園の言葉を信じていつか、前園と共に秘密特別捜査隊の仕事の手伝いが出来ればなと思っていたりする。

恵様は、相変わらず笑いを絶やさない素敵なプリンセスの道を歩み始めていた。それは、杉浦が、もう、プリンスとしての実力を発揮し始めていたからである。

あ、あの後、杉浦にはきちんと謝罪しました。杉浦は、通信機器で前園にこつぴどく叱られたようだけど、でも、自分はあれで良かったと思っっているらしい。で、時々私を見ると、右頬を押さえる仕草をしてくる。だから、謝ったってば！  
そして、

「あたしと厚史、一年後に結婚するから！」

全く早い事で、もう、式の日取りまで決めてしまっている恵様。何だか寂しい気もするけど、でも素直にお祝いしたい気持ちも有る。「で、思うんだけど……暫くの間、絵夢にはあたし付きのメイドさんやって欲しいの」

と言う事で、話は纏まった。私は、アカンシヤスで生活する間、恵様から悪夢を補給しなければ生きて行けない体だから。きつと、前園と結婚するまでの保険と言う事なのであろう。私は、勿論恵様

の行為を仇で返すつもりはない。その分シツカリ働かせていただきます。

そんな甘い日々が過ぎていった。

そして、結婚式の当日はやってくる。

「恵様の晴れ姿、この目で見れて光栄です」

私は、仕度されている恵様の手伝いをしながら最期になるって訳でも無いのに、言葉を掛けた。

「あたしも、絵夢には色々なものを貰ったわ。貴女がいなければ、今のあたしが居るなんて思えないものね？」

不思議に思っていたこと。一体私は、恵様に何を差し上げていたというのだろうか？

「私は……恵様に貰っていただけです？一体何を私は差し上げていたとおっしゃるのですか？」

そう、杉浦も言っていた。何を？

「友情と、愛。そして、信じる心」

そう言って笑ってらっしゃる。

「それら全てが、心の支えになり、そして安心できたの。ありがとう。絵夢？」

私に、そんな大それた物を求めてらっしゃったの？で、私はそれにちゃんと応えていた？そう思うと、涙腺が緩む。

「式はこれからよ？泣かないでよ」絵夢？

そう言って慰めてくれた恵様は、アカンシヤス一のプリンセスだと私は思った。

式は、華やかに行われた。蝋燭とライトと、伝統的なものと今風な物を取り揃えた、豪華で可憐な結婚式。

アカンシヤスの闇が此処から消え去るかと思えるくらい鮮やかであった。

私は、この日のために一度帰還した、前園と一緒にこの式を見守

った。

「お久しぶり」

「うん。元気にしてたかい？」

取りとめの無い言葉を交わして私達は、こっそり手を繋いで見守った。

そして、この豪華な式が終わりを告げようかという頃に、

「後一年で、秘密特別捜査隊の仕事で一人前になれるみたいなんだ、それまで待っていてくれ」

と、前園はこっそり耳打ちした。それを聞いて、私は、

「勿論よ！私もそれなりに勉強し終えることが出来るから、待っていてね？それから、地球に移住したら、寄りたいところがあるの」

「何処だい？」

「父のお墓」

前園の耳元で囁いた。

私は、母には会えないけれど、父には、お墓であろうと行くことは出来る。

「君のお父さんなら、僕の叔父さんだ。勿論案内してくれよ？」

私達はお互い顔を見合わせて笑った。

そこにケーキが運ばれてきた。どうやら、此処に出席している者達にも配っている様子であつた。そして、アナウンス。

「このどれかのケーキの中に、指輪が二つだけ隠されています。それを引いた方が、次の幸せを掴む者達です。それではご賞味あれ！」

司会がそんな事を言った。

「見つかったら最高ね？」

「そんな偶然有ったら、面白いけどね？」

二人同時に頬張ったそのケーキの中には、指輪が隠されていた。

「あ……」

私と、前園は同時に声を出した。

「入ってた……」

「私も……」

私は、前方に視線を向けた。恵様が遠くで笑ってらっしゃった。そして、

「次の花婿、花嫁に幸あれ！」

その声が、アカンシャス中に、そして、私の中で木霊していた。

世界よ幸あれ。そして、愛よ永遠に……

## #5 永遠の愛（後書き）

さりげなく、女の子はアルファベットの名前。  
此処拘ってたり。

男連中は普通なのですが・・・

夢の世界って不思議だなんて想うんです。

でも、どうなんだろう？悪夢って実は良い意味合いの物もあるんで  
すよね。その辺りは描いてません。

それでも、皆が幸せな世界になっただけならば幸い。

また、色々とUPしていきますので、お付き合いを。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2176d/>

---

アカンシャス・ワールド

2010年10月8日14時48分発行